



# 男は 痛い !

國友万裕

第29回

『50回目の  
ファーストキス』

## 1. 仙台はただの都会だった。

夏休み、学会発表で仙台に行った。発表と言っても、今回は他の先生たちとの共同発表なので俺が話すのはほんの5分くらいだ。気楽なものだった。むしろ、仙台の街を味わうことを楽しみにしていた。俺にとっては初仙台なのである。

2日前から埼玉の叔母の家に泊まり、東北新幹線で仙台に向かった。関西や東京は異常な酷暑で外に出る気にもならない日々が続いていたが、仙台は10度くらい気温が低く、涼しかった。あいにく、天気は雨模様だったが、暑さにげんなりしていた時期だったので、仙台の気候は心地よかった。

仙台駅の近くのホテルに2泊3日。発表は最終日の朝でそれまでは同行した先生たちとのグルメ三昧が続いた。最初の夜は魚料理中心の居酒屋。翌日の昼はフランス料理、その後、松島を観光した後、夜は焼肉屋、3日目、発表が終わって、昼は前日とは別の店でフランス料理を食べた。同行した先生たちが独身貴族の人が多かったせいか、食事に湯水のようにお金をかける。どれもこれも、値段に見合うくらいに美味しかったのだが、関西であっても高級レストランはいくらでもある。別に大阪と大して変わらない町だなあと思った。学会参加だったので、東北の訛りも全く聞こえてこない。ずんだ餅のサブレや羊羹や大福、お土産用のお菓子はたくさんあったのだけど、ずんだ餅くらい京都でも売っている。それにこの頃はネットの通信販売もあるから、日本のどの地域の名産品でも入手することは簡単にできるのだ。

そんなわけで、仙台の人には失礼なのだが、仙台旅行はなんとなく物足りなかった。事前に仙台出身の元教え子に、「今度、仙台に行くんだけど、どこかいいところ教えてくれ」とメッセージしたら、「僕、よくわからないんです。特別なのはあまりないと思いますけど」という返事がきていた。その子は自分の故郷だから謙遜して言ったのかと勝手に思っていたけれど、彼の

う通りだ。仙台は東北で一番の大都市だが、ユニークなところがあるわけではない。単なる都会だ。京都のような観光都市ではないので、取り立てて、見るところもないし、期待していたような風情のある街ではなかったのだった。暮らすには暮らしやすいだろうが、観光で行くような街じゃないなあ。

それとも、年をとって来て、俺の感性が鈍って来ているからそう感じるのか。思えば、映画を見ても、小説を読んでも、昔ほど感動はしなくなって来ている。50代の半ばにもなると刺激を感じる事が少なくなってくるのだった。

## 2. 俺は東京の方が向いているのかも！？

とはいうものの、東京圏は何回来てもそれなりの感動がある。叔母の住んでいるところは埼玉の大宮。東京のベッドタウンである。東京の場合は何よりもその広さに圧倒される。人の住む街が延々と放射線状に続いて行く。どこへ行っても人の海。東京は広いなあ、大きいなあ、という感動をいつも起こさせてくれる。しかも、東京の場合は、ほとんどは地方からの人ばかりで、生粋の江戸っ子という人はまずいない。俺の知り合いに早稲田出身の人がいるのだが、大学の頃、クラスで東京出身は彼1人だったのだそうだ。関西の大学も他の地方からの人は多いけれど、そこまではならない。それぞれの故郷を背負った人たちが一同に集まり、そして、それをドンと受け止める大きなメトロポリス。東京には都会のダイナミズムが溢れている。かつては東京に憧れていた俺だった。東京に行くといつだって胸踊るような興奮があるのだ。

東京だったら市井の片隅にひっそりと暮らしていても、誰も気には止めないだろう。この後、年をとって、仕事が定年になったら、東京で暮らすのも悪くないかもしれない。占いによれば、俺は老後は孤独なのだそうだ。きっと、そうだろう。パートナーも子供もいないわけだから、それは覚悟しなきゃいけない。東京の

方が孤独に生きるのにはいい。東京に地震が来たら、大変なことになるだろうけど、老いて、自分が死ぬときとなったら、他人のことなんてどうでもいい。こんなことをいうと怒られるけど、災害が起きて、多くの人と一緒に人生を終えるのが、寂しくなくていいのかもしれない、と想像してはいけないことを思ってしまうのだった。

前に社会運動家の人から言われたものだ。「東京は日本の中心だから、マスコミや警察がすぐに出てくるから、社会運動は関西の方がしやすい」のだと。当時、社会運動をやってみようかと思っていた俺は、関西でよかったと思ったものだった。しかし、その後、いくつかの社会運動団体での経験を経て、結局、俺は社会運動には向いていないのだと悟るにいたった。

ああいう世界はクリーンな世界ではない。一般の企業社会も裏側ではパワハラやモラハラが渦巻いているのだろうが、表向きは皆クリーンを装っている。しかし、社会運動家の人たちは往往にして表向きを装うことをしないため、余計に薄汚く見える。

思えば、俺は子供の頃から映画や音楽や文学が好きで、美しいものが好きで、華やかなハリウッドスターに惹かれる人間だ。綺麗な世界でないと生きることができないのである。社会運動には関わらない方がいい。共感できる運動には、お金だけ寄付して、自分自身は距離を置いていた方が、俺の性格にマッチしているのだ。

## 3. 変わって行く社会

それに社会運動なんて、まさに牛歩である。わずかずつしか進んでいかない。仙台に行く前日に東京である出版社の人と食事をしたのだが、思いもよらないようなことを言われた。「男性ジェンダーって、何なんですか？」その人は俺と同じ年で、俺と同じ九州の出身。大学から東京に出て来た人である。その人から「男性ジェンダーって、何なんですか？」と言われ

たのは、ちょっとショックだった。インテリで、大人しいタイプの人だし、肉食タイプの男性ではないのに、男性ジェンダーが全くわからないとは意外だった。「男性差別はたくさんありますよ。学校なんかでも、男子の方が厳しくされるでしょう？」と俺が言うと、「僕が中学の時、騒いでいた時も、僕たち男子同様、女子もビンタされていましたよ」と彼はどうもしっくり実感がわかないような顔をした。もちろん、女子であっても殴る先生はいる。しかし、全体的にみれば、男子の方が体罰・厳罰に処される割合は絶対に多かったはずだ。だけど、彼のセンサーはそれを感知していなかった。人によって、センサーの機能は千差万別で、ジェンダーの部分には反応しないセンサーの人と、敏感に反応するセンサーの人がいるのだということをあらためて思ったのだった。

今、他の先生たちと共同で英語のリーディングのテキストを作っているのだが、共同作業となると自分ではうっかりしていたことを指摘してもらえ。先生たちがセンシティブになっているのは主として差別の問題である。例えば、障害者のことを *physically handicapped* と表現すると差別的なので *physically challenged* に変える。差別的な表現を使わざるを得ないときは、これは「蔑称」ですと但し書きを入れる。また、ディスカッションのテーマにも気を遣う。映画とジェンダーのテキストなので、「性的な場面を含む映画を見たのは何歳の時ですか？」「マイノリティの人とどう接しますか？」というクエスチョンを俺は思いついたのだが、これらの質問は削除となった。ジェンダーのことを理解している先生がテキストを使うのならば問題ないが、わかっていない先生が使うと誤解を招くような解説をしてしまう可能性があり、それが問題になると、作り手である俺たちの責任になる。ジェンダーの議論だから、センシティブな問題が出るのは仕方がないようにも思うし、質問に答えたくない学生には黙秘権があるのだが、そうであっても、下手を

すると裁判沙汰になるというのだ。

先生と学生の権力関係が逆転して来たことはしばしば言われる。セクハラだけじゃない。この頃の先生はほとんどサービス業という人もいる。

専門学校で教えていた頃のことだ。ある昼休み、普段は俺に話しかけても来ないような女の子が昼休みに俺のところ近くに近づいてきた。彼女のクラスは、その前の週に学生たちの私語がうるさいというクレームが教務にきていて、それで上の先生からの指示で、クラスのやんちゃな男の子 K 君をちょっとだけ注意したのだった。

「先週、授業のことで文句を言いに行ったの私なんです。でも、私はあの時、K 君が嫌で言いに言ったのではなくて、あの雰囲気を取りまとめられない先生が嫌だったから言ったんです。だから K 君ばかり注意しないでください。この前の時は、先生から注意された後、すごく落ち込んでしまって、気の毒やった」

俺は、この時のこの彼女のセリフには本当に切れかかった。うるさい子をほっといたらほっといたで文句を言いに行き、注意したら注意したで文句を言いに行く。しかも、俺は K 君をそんな厳しく怒った覚えはない。彼女は自分のせいで、K 君が注意されたと思っているので、ちょっとのことを大きく捉えてしまっている。自分のせいで K 君が怒られたと罪悪感を抱いているのだろうが、「なぜ、K 君にはそれだけ優しくなれるあなたが、俺に対しては意地悪ができるのか。教務に告げ口なんてされたら、俺の方が嫌なことを言われるんだぞ。俺たちは非常勤講師だから権力があるわけではない。収入だって、あなたが思うほどもらっていない。悪評が流れたら、雇い止めになることだってあるんだ！」と思わず言いたくなった。でも、そんなことを言ったら、余計に彼女は俺に対する敵愾心を募らせるだろう。ぐっと、我慢。

専門学校ではこれくらいのことは日常茶飯事に起きていた。彼女のいるクラスは大人しい子ばかりで、

話しかけて来ない子が多いため、俺がクラスの実情がつかめていなかったのが問題だったのだろう。テキストが難しすぎて、学生の方はしんどかったらしいのだが、俺のところまでそれが伝わっていなかったのだ。その後、前期末の授業評価アンケートに酷い文句を書かれた。「わかりづらい。これじゃあ、実力がつかない。先生が合わないから先生の変更をお願いします。」結局、俺は秋からクラスを他の先生のクラスと入れ替えることになった。「酷いことを言う子もあるものだね。僕だったら、そんなこと言われたら、自殺したくなるだろうなあ」と他の先生から同情された。俺もあの時は相当凹んだ。その直後、K君が職員室に「先生、缶ジュースおごって」と声をかけにきた。「あなたたち、僕のことが嫌だったわけでしょう。『先生を変えて欲しい』なんて、あんな酷いこと書いて、よく、『ジュースおごって』なんて言えるよね」と俺は言った。「僕はそんなこと言っていないですよ。アンケートの点数もいい点数をマークしましたよ。ただ、あの人たちは・・・」とK君は激しく否定した。彼の様子から考えて、彼は俺に対してなんの悪意を持っていないことはわかった。ホッとした。とは言うものの、このことは、俺にとっては、10年近く過ぎた今でも消えないトラウマ的な思い出となった。

もちろん、大学はここまで先生に対して過酷ではない。専門学校は学生数が少ないせいもあり、こういうことが時として起きるのである。学生たちの中にも、学生がちょっと文句言ったくらいのもので、学生のわがままが通ってしまうのは問題だと思っている子もいる。しかし、今の学校をめぐる状況は厳しくて、学生をお客さん扱いせざるを得ないのである。

とは言いながらも、学生が先生に文句を言える社会になったこと、先生たちが学生の心の問題やマイノリティの問題にセンシティブになって来たことは好ましいことでもあるので、こういう状況を非難することもできない。俺が子供の頃は理解のない教師たちに

泣かされた。小学校の時の女性教師、中学の時の体育教師、大学の頃のゼミの指導教授。俺の心に深い傷を彼らが残したのは、彼らが教師の特権を乱用したからだった。あの頃は先生が絶対の時代で、文句をいうことすらできなかったので、合わない教師に当たってしまうととんでもないことになってしまっていたのだ。あれから数十年の月日が流れても彼らから負わされたトラウマは消えそうにない。

その俺が教師になって、今度は無茶な要求を突きつけてくる学生たちに泣かされる。因果なものだと思っただけだった。男女関係も、昔は泣くのは一方的に女性だったけれど、この頃はそうとは限らない。先生と学生の関係も逆転とまでは行っていないにしても、徐々に変わっている。世の中は確実に変わっているのだ。これからは男性ジェンダーの問題も進化はして行くだろう。理解は深まって行くだろう。そう思っただけで、10年後、20年後の世の中に期待するほかないのだ。

#### 4. 復讐するは我にあり

ある10月の日曜日、その日は最近知り合った牧師さんに誘われて、大阪に行った。アメリカ映画や文学が研究分野である俺は、キリスト教には殊の外関心があった。キリスト教を知らずして、アメリカを語ることは難しい。アメリカは何事も徹底主義で、マイノリティに対する風当たりも強いが、それはキリスト教の縛りが強いからだろう。その辺りも理解したかった。

それと信仰を持ちたいと言う気持ちもあった。これからやってくる老いや死に対する心構えをつけたいのだ。俺は信じていることができるのであれば、仏教でもキリスト教でも、どちらでも構わないと思っていた。日本人だから、仏教の方が本を読んでいて、しっくりくる部分は多いのだが、キリスト教の方が新しい視点を与えてくれる。それにアメリカは神や天国を信じる人が日本に比べて多いと聞いている。死後の世界なん

て、誰にもわからないが、信じられるものなら、死後の世界の存在を信じたい。自分の存在が無になるなんて、考えただけで怖いけれど、死は確実にやってくる。これだけは避けられないのだから、どうにかして受け入れる心の体制を作らなくてはならないのだ。

今から40年ほど前、緒形拳さん主演の『復讐するは我にあり』という映画があった。殺人鬼を描く映画でこの年の映画賞を独占した映画である。今村昌平監督らしく、人間の業が画面にみなぎるような映画だった。俳優さんたちも皆名演だった。

無知を晒してしまうのだが、俺はこのタイトルの意味を最近まで知らなかった。最近になって、その牧師さんから教わった。単純に「俺が復讐してやる」という意味だと思っている人が多いけど、そうではなく、ここでの「我」は「神」のことなのだそうである。したがって、「誰かに復讐してはならない、神が復讐してくれる」ということなのである。

映画では怒りに満ちた殺人鬼が主人公だけれど、このタイトルは反語なのだ。俺はこれまで様々な人たちから踏みつけにされてきたが、これまで俺を傷つけて来た人たちには神がいつか復讐してくれる、そう思って生きていくしかないのだろう。俺自身が復讐しても何もならない。俺の評判を落とすだけだ。どうしても相手を糾弾したければ、裁判という手もあるが、そこまでするような精神的・経済的ゆとりはない。神が俺の憎しみを浄化してくれるのを祈るほかないのだった。

この日はビスケットパーティーで、アメリカから日本にきている牧師さんたちと楽しく過ごした。日本の信者さんとも知り合った。皆いい人たちだったが、とりわけ、俺と同年のアメリカ人男性の牧師さんがいて、話が弾んだ。同年だから、これから老いや死に向かって行く時期も同じだ。あれこれ語り合えそうだった。思った。

来年の夏休みには思い切って、彼らとともに2週間ほどアメリカ南部に旅しよう。思えば、アメリカも長く行っていない。信者の人のところにホームステイさせてくれると聞いているので、あれこれキリスト教の真髄に触れることができるだろう。久々に胸踊る感動が待っているかもしれないのだ。

## 5. ラブラブ両親

これも10月のある日。ある若い男性からメールが来た。「ちょっと時間をくれませんか」というのだ。その男性とは行きつけの喫茶店で知り合った。彼は大学卒業までここでバイトをしていた人である。と言っても、俺とまともに話したのは1、2回しかない。その彼から何の話？ 一瞬戸惑ったが、言ってみると人生相談だった。俺も若い子からメンターと見てもらえる存在になっただけいい。嬉しいことでもあった。

「仕事を変えたいと思っているんです。いまの会社だと単身赴任がありますし。僕は内縁関係の彼女もいるし、結婚して子供を作る予定です。子供が多感な時期にそばにいられないのは辛いんです。僕は子供の頃、父にたくさん遊んでもらって、お父さん大好きだし、子供ができたら、家事や育児もちゃんとやっていきたいし」というのだ。彼と一緒に連れてきたもう一人の同僚も彼と同じ考えのようで、転職のない公務員の試験を受けようかと考えているみたいだった。小さな会社でもいいのならば、転職のない会社はいくらでもあるだろうが、大きな会社の場合は、そうは行かないのだろう。

「とにかく、自分の好きなように生きなさい。自分の心のままに生きていけば、いつか繋がってくるもんだよ」と俺は話した。後悔のない人生を歩むためには、人がどう思おうと自分がしたいように生きるしかない。それが俺が55年近い人生から得た教訓だった。

彼ら2人と話していて意外な発見だったのは、2人とも親がラブラブだと言うのだ。もう50代のご両親な

のに今でも仲が良く、しょっちゅう2人で旅行に行く。だからこそ、彼らも家庭生活に甘い夢を持っている。

俺の周りの人たちは、どちらかといえば、結婚がうまく行っていない人ばかりなので、結婚して30年も過ぎて、まだラブラブの夫婦がいるというのは驚きだった。彼らと会った後も、しばらくはその驚きが続いていて、俺は、大学での教え子など色々な人に「親はラブラブなの？」と尋ねた。するとラブラブというほどのおしどり両親は流石に少ないけれど、しかし、いないわけではないことがわかった。それこそ赤い糸で結ばれているような人と出会う人と、そうでない人がいるのだろう。人間の人生は運命なのだった。

## 6. 『50回目のファーストキス』

(福田雄一監督・2018)

もうすぐ55歳だ。いよいよ四捨五入すると60歳。イオンシネマではシニア料金。すっかり初老である。もうどこから見ても若いとは言えない。20歳くらいの連中から見るとおじさんを通り越して、おじいさんの年齢に突入する。もう女性と付き合うことは永遠にないだろう。キリスト教では離婚は戒められるけれど、独身はむしろパウロみたいで、カッコいいというイメージがあるのだそう。俺はパウロだと開き直って、一生女性と付き合いわずに生きるかしかないか。

そう思っていた矢先にこの映画を観た。アダム・サンドラーとドリュー・バリモアの主演のハリウッド映画の日本版リメイクである。俺は基本的に恋愛映画は嫌い。俺自身が女性を信頼できなくて、恋愛できない人なので、見ていて気分が悪くなる。しかし、この映画は楽しいコメディに仕上がっていて、なかなか楽しかった。長澤まさみ演じるヒロインが事故のトラウマで、短期記憶がなくなってしまうという話で、俺と一脈通じる部分もある。俺は少年の頃のトラウマで、その後の人生をうまく紡げなくなっている。女性とも付き合えなくなっているからである。

この映画で、とりわけ、いいと思ったのは主演の山田孝之である。彼はただイケメンというだけではなく、演技力のある人で、彼のおかげでこの映画の面白さはアップしたと言っていい。この映画で発見したのは、彼には胸毛があるということだ。確か他の映画で彼の裸を見たときは生えていなかった。おそらく、剃ったのだろう。彼は、「電車男」を演じたこともあるし、どちらかと言えば可愛い系の男だ。その彼に胸毛があるというのは微笑ましいし、またそれを映画によっては剃っているというのが、俺には嬉しく思えた。俺も毛深い方なのだが、昔は男がムダ毛を処理するなんて、おおっぴらにはできなかった。時代は少しずついい方に向かっている。

また長澤まさみの弟がゲイなのかゲイではないのか、とにかくゲイ的キャラクターの人物として出てくる。日本は昔から、美川憲一とかおすぎとピーコとかマツコデラックスとか、ゲイキャラの人を笑いのネタにしてしまう。この映画の彼の役もコミックリリーフなので、そこはこれから考えて行くべき問題だろう。これは、ゲイキャラの人は笑い者にしてもいいというメッセージを送ることもなるのだから、実際にゲイの人にとっては大問題だ。しかし、笑いをとる役であってもゲイキャラが存在感を増してきたことは、悪いことではないのかもしれない。LGBTは身近に存在することを世の中に示すことができるのだから。

トラウマへの理解、胸毛処理、ゲイキャラの存在感。あれこれ、問題はあったにしても、結論としては今の方がいいということになる。男は痛い！状況は、そうそう革命的に変わって行くものではないが、少しずつ、進歩と後退を繰り返しながら、最終的にはいい方に進化して行くだろう。俺がこの世を去る頃には、男はどう変わっているだろうか？